

## 『淫穴主将猛 覚悟の卒業試験』 サンプル

作者：金目

## 目次

登場人物紹介

前章 猛の欺瞞 猛の自覚

出願 人生放棄宣誓

(服従宣言)

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

試験開始前 猛の人生放棄再確認

(ペットボトルションベン、恥辱)

第一の試験 女性で勃起するな

(玉責め)

追試 ペットボトルションベン行脚

(野外露出、恥辱)

第二の試験 ペットボトルおちんちん

(恥辱)

第三の試験 ????????

(全裸で仲間のパンツの手洗い、妄想による射精)

男からの卒業最終試験 男の理想像とのセックス

(男の理想像として尊敬する先輩とのアナルセックス)

後日談 高坂猛はもっとほしい

### 【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実には存在する個人・団体などとは無関係です。無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の描写はすべてファンタジーであり、今作には現実の社会倫理にそぐわない描写もありますが、虚構としての描写であることをご了承ください。

## 登場人物

### 高坂猛（こうさか たける）

大学四年生。丈翼大学剣道部主将。

通常時 11.6 センチ、勃起時 23.7 センチのペットボトル早漏チンポの持ち主。

大門関銀行への就職を機にお見合いを勧められたことが発端となり、己の詭弁に気がつく。

### 鳴島泰輔（なるしま たいすけ）

大学四年生。丈翼大学剣道部所属。

猛の親友。猛にとって特別なチンポの一人でありたいという願望を抱いている。

猛に頼まれ、猛の調教を主導する。

### 岩神龍一（やがみ りゅういち）

男。30 歳。剣術道場師範代にして、殺陣師。

卒業と就職を控えた猛に、猛の父親の代理としてお見合いを勧めている。

年代が近い先輩ということもあり、猛にとって男の理想像である。

## 前章 猛の欺瞞 猛の自覚

二月中旬、時折強く吹く北風が窓を揺らしている。

高坂猛（こうさか たける）は、寮の自室で、鳴島泰輔（なるしま たいすけ）と二人きり、向かい合って座っている。

猛のルームメイトである小坂拓斗（こさか たくと）は、丈翼大学卒業後に所属する研究室の研修会に参加しており、卒業式前日まで帰ってこないため、猛か、泰輔のどちらかが招かない限り、この部屋に寮生が勝手に入ってくることは、まずない。

この、二人きりの状況で、猛は、泰輔にある頼みをしようとしていた。

これから、口にする頼みに対し、猛は迷いがある。

こんなことを望んでいいのか。

こんなことを頼んでいいのか。

七日間、迷い続け、目の前に座る泰輔に話すことに決めたというのに、まだ、迷いを振り切れない。

それは、高坂猛という人間の未熟さであり、甘えであり、欺瞞だ。

猛にとって、己の未熟さとは、己の意志と努力によって克服するものであった。

だが、これだけは、どうしても、己一人では克服できない。

どうしても、誰かの助けが必要だ。

そして、猛が助けを求める相手として、最初に浮かび、そして、最後まで残った男が、泰輔だ。

「泰輔、その、これから頼むことは、滅茶苦茶なことだって自覚はある」

猛は、向かいの椅子に座る泰輔にそう前置きをする。

そうだ。

これは滅茶苦茶な望みであり、願いだ。

その自覚が、猛にはある。

この社会の常識と倫理観、そして、両親からの「立派な男になりなさい」という期待を受け入れ、生きてきた猛の価値観を真っ向から否定する望みだ。

「猛の頼みで滅茶苦茶、かー」

卒業後もセックスフレンドでいてほしい、なら、歓迎だけど、いや、滅茶苦茶ではないか」

泰輔は軽口を叩きながらも、その目は、剣道の試合前のように揺らいでいる。

泰輔が緊張しているときの癖だ。

こんな風に、緊張を軽い態度で誤魔化しているのに、いざ、試合が始まれば、泰輔はそうすべきと定められたような、芯のある竹刀捌きを見せる。

迷いを断つのではない。

迷いを忘れるのでもない。

迷いを抱えたまま、揺らがぬ竹刀捌きをできるのが、泰輔の強みなのだ。

それは、迷いは断つものだと教えられてきた己には至れない境地だと、猛は感じている。

矛盾を飲み込めない器である己と、泰輔の違いであると悟っている。

本題に入ろうとして、猛は、逡巡してしまう。

こんなことを、望んでいいのか、と猛が受け入れてきた常識が、倫理観が、両親からの期待が、猛を糾弾するのだ。

言葉に詰まった猛を、泰輔がじっと見つめている。

猛は、もう一度覚悟を固める。

今、泰輔に打ち明けなければ、猛が抱く滅茶苦茶な望みを誰かに相談しようとする勢いがもうなくなってしまうだろう。

「……俺を」

猛は、泰輔の目を見つめ、震える声で告げる。

はしたない。みっともない。おぞましい。

社会性を有する己が、嫌悪感を隠さずに叫んでいるが、それでも、猛は、滅茶苦茶だと自覚している望みを、叶えたい。

「俺を、高坂猛を、調教してほしい」

猛は、己の滅茶苦茶な望みに、泰輔が驚くか、呆れるか、あるいは、冗談だろうとか、そういう反応をするだろう、と想像していた。

だが、泰輔は真剣な表情で猛を見つめている。

そして、泰輔の喉がごくりと唾を飲み込む動きをしたのを、猛は見た。

「……俺が、猛を調教して……？」

泰輔が、信じられないと言いたげな表情で、猛を見つめている。

泰輔の表情は「調教されたいなんて言い出すとか信じられない馬鹿だな、お前」という感情の発露ではないか、と猛は不安になる。

馬鹿げた望み、おぞましい願いだと評される自覚は、猛にもある。

猛の常識、猛の倫理観、猛に向けられている両親からの期待は、猛の望みを否定し、拒絶しているのだ。

その一方で、猛は、泰輔が明確に拒絶の意志表示をするまでは、まだ分からない、と望みが叶う可能性に縋ろうとしている。

パン！

寮の部屋に、肉を叩く音が鋭く響いた。

泰輔が自身の頬を思いっきり引っぱたいたのだ。

強く叩いたせいか、泰輔の頬にはうっすらと手形が浮かび上がっている。

それから、泰輔は髪の毛をかき乱しながら首を左右に振る。

猛は、泰輔が首を振ったのは、「調教なんて馬鹿げている」という拒絶の意志表示だと感じた。

猛は受け入れている社会常識や倫理観で判断をするのならば、「調教してほしい」と親友に願い出ること自体が、どうかしていることだ。

泰輔と猛はチンポとケツマ○コでのつながりもあるので、この時点でどうかしているの

だが、「調教してほしい」というのは、これに輪をかけてどうかしているだろう。

「……悪い。変なことを——」

「詳しく聞かせろ」

両肩を泰輔に力強く掴まれた猛は、謝罪の言葉が詰まってしまう。

泰輔の顔は、困惑と獰猛な雄の凄みが半々といった様子だ。

「あ、違う。そうじゃない」

泰輔が猛の両肩から手を離し、深呼吸を繰り返す。

「悪い。混乱してた」

泰輔が猛に軽く頭を下げる。

「あ、いや、そもそも俺が変なことを言い出したからで」

猛も、泰輔に軽く頭を下げる。

「猛が、冗談でそういうことを言い出さないことは理解してる。

ただ、俺の想像しなかった頼みだったから、前後の経緯も含めて説明してほしい」

泰輔の真剣な表情での問いかけに、猛は頷いた。

言われてみれば、その通りだ。

猛にしてみれば、七日間悩んだ末の結論なのだが、泰輔にしてみれば、その悩み抜きに結論である「調教してほしい」という望みだけ伝えられても困惑するだけだろう。

それに、泰輔に改めて説明をすれば、猛の中の絡まった未練も少しは整理できるかもしれない。

「一週間前、父さんの代理としてこっちに来た龍一さんにお見合いを勧められたんだ」

そして、猛は、己の迷妄を泰輔に明かし始めた。

「龍一さん、これは？」

喫茶店で向かいの席に座った岩神龍一（やがみ りゅういち）から紐で封じられた箱を差し出された猛は、中身について尋ねる。

「師範、いや、猛の御父上からお預かりした釣り書だ。

師範は、卒業を機に身を固めなさい、と仰せだ」

対面するのは 3 年ぶりだが、龍一は大和男児と呼ぶのに相応しい偉丈夫だ、と猛は感じた。

着流しを好んでいる龍一は立ち居振る舞いが非日常的だ。

悪目立ちするのではなく、剣術で鍛え上げられた振る舞いと着流しの相乗効果で、どこに立っていても、時代劇のワンシーンのような錯覚を見る者に与えるのだ。

浅黒く日に焼けた肌は、色白の肌の猛には出せない男のエロスを醸し出しており、表情が殆ど動かない仏頂面も、不愛想ではなく、力強さを印象づける。

本業が殺陣師である龍一は、猛にとって特別な男だ。

今は剣術から離れ、アスリートとして剣道に邁進している猛だが、実家の剣術道場で師範でもある父親、彰から剣の基礎を教わっていた。

そして、猛にとって、男の理想像が龍一なのだ。

龍一の立ち居振る舞いは、幼い頃の猛にとって特別なものであり、真似をしても届かない

と悟るまでの間、猛は、龍一の真似を好んでしていたのだ。

もちろん、猛は実父である彰を尊敬している。

だが、実父である彰は世代が異なるため、猛の理想像とするには遠すぎる。

それに対し、龍一は世代が近いと、猛にとって、男の理想像としてイメージしやすいのだ。

龍一は決して怠ることのない剣術家であり、殺陣師である。

だから、猛がどれほど剣の道に邁進しようとも、猛が進んだ分だけ龍一もその先に進んでいる。

追いつこうとしても追いつけない。

けれど、いつか追いつきたいと猛が憧れと敬意をもって見つめているのが龍一なのだ。

「父の代理で来ていただいた龍一さんには申し訳ないのですが、俺は、結婚なんて考えられません」

尊敬する彰の代理であり、猛にとって特別な憧れの男である龍一の言葉とはいえ、猛はお見合いについて、受け入れる気はなかった。

「それは、一家の主として、家を支える自信がない、ということか」

「そうです」

龍一の問いかけに、猛は頷く。

猛にとって、結婚して一家の主になるというのは想像しにくい。

猛の周囲では結婚や婚約の話が出ており、22歳でそうした話が出るのが早すぎるわけではないことは、猛も理解している。

だが、猛は結婚などする気はない。

いや、猛と結婚してくれる女性がいるとは思えないのだ。

理由は簡単だ。

猛は、早漏なのだ。

どれほどの早漏かというと、過去にチンポセックスに挑んだ際、相手の男のケツで何度も絶頂しておきながら、相手の男を一回もイかせられないほどだ。

結局、その時の猛は、三連ケツの真ん中、ケツを掘られながらケツを掘る形で相手のケツをイかせたのだが、それは、ケツマ○コを蹂躪されるとギンギンに勃起し続けられる猛の性癖のおかげであり、猛のチンポの性能ではない。

ペットボトル早漏チンポ、と猛のチンポは様々な男たちに評されているが、見た目だけなら文句なしのチンポなのに、チンポセックスにおいて、弁解の余地のない不能であり、無能なのだ。

そんな見掛け倒しのペットボトル早漏チンポとセックスをしてくれる女性がいるとは思えないし、猛としても、己の早漏を女性に知られることは避けたい。

童貞より先に処女を失い、ケツマ○コを使われ、蹂躪される快楽に逆らえない猛だが、精通は女性への妄想に触発されたし、恋愛の対象は女性だ。

ただ、早漏であることは猛を女性との恋愛に消極的にさせたし、同時に、猛はケツマ○コの奴隷だ。

ケツマ○コを使われ、蹂躪される快楽を完全に断つことなど、猛には無理な話だ。

そして、仮にセックス抜きで夫婦関係が成立したとしても、夫が定期的にチンポをケツに

ぶち込まれたがるケツマ○コの奴隷だなんて、妻となる女性にとって迷惑だろうと猛は考えている。

「師範は、お前の年ぐらいでもう結婚をされていたし、俺も今年で結婚8年目だ。

剣術と剣道では評価基準こそ異なるが、お前の剣の腕と人格、そして、就職先の企業である大門関銀行ならば、剣道部としての歴史と実績があり、社会的な評価としては十分だ」

龍一がそこまで告げると、パンケーキにナイフを通し、一切れ口に運んだ。

喫茶店でパンケーキを食べているというのに、大和男児としての雰囲気強く漂わせる龍一がそうしていると、パンケーキではなく和菓子を食しているように見える。

「これは、俺が師範、猛の御父上に諭されたことでもあるが、役目を背負うことで生まれる自負もある。

ならば、結婚することでお前にも家長としての自覚が生まれるだろう」

尊敬する男である龍一に諭され、猛は頷きたかった。

だが、猛は父である彰や龍一のような家長になどなれない。

今の風潮ならば、セックスレスでの夫婦関係というものも、奇異の目で見られることは少ないだろう。

だが、猛は性欲がないわけではない。

女性の教育実習生への妄想で精通をしたように、女性への性欲があるノンケだ。

ただ、己のペットボトル早漏チンポはチンポセックスにおいて完全なる不能であり、無能だ。

そして、猛は、ケツマ○コの奴隷でもある。

ケツマ○コをチンポに使われ、蹂躪される快感に逆らえないし、それらの快感を拒み、完全に断つことなどできるはずもない。

夫である猛が、他所で男に犯され、善がっているなどというのは、あまりにも妻となる女性に失礼だと猛は感じているのだ。

「……すいません。

龍一さん、いや、父の言葉でも、俺は、結婚はできません」

猛は龍一に頭を下げ、釣り書が封ぜられた箱を龍一に差し戻した。

「……したくない、ではなく、できない、なのか。

まさかとは思うが、道ならぬ関係をつなげているのではないだろうな」

龍一の指摘に、猛はびくっとした。

道ならぬ関係、というのならば、猛はもう深みに嵌まっている。

DK時代にケツマ○コの快楽に目覚め、ケツマ○コの奴隷である己を自覚した猛は、寮生や教師たちにケツを差し出し、ケツマ○コの快楽を享受していた。

大学生である今も、猛を求める男たちの諍いを防ぐためのセックスチケット制で毎日アナルセックスを愉しんでいる。

二週間ぐらい前には、卒業記念という名目で猛のエロ動画の撮影も行われた。

道ならぬ関係、尊敬する男である龍一や父である彰に知られたくない関係というのならば、ケツマ○コとチンポでつながった猛の人間関係こそ、その極致だ。

「いや、愚問だな。

お前は不倫をするような愚か者ではない。

「そうだろう？」

「ええ、不倫なんてしていません」

龍一の問いかけに、猛は自信をもって頷いた。

猛と猛を抱いた男たちとの関係は、性欲解消でしかなく、そこに恋慕は一切ない。

猛は快楽以外をチンポに求めたことはないし、男たちもまた、猛との恋愛を求めたことはない。

だから、猛は不倫などしていないのだ。

「だよな、お前の言葉に嘘はない。

となると、分からんな。

何が、お前をためらわせているのだ？」

龍一の表情は、眉が少しひそめられているだけで殆ど変化していないが、長い付き合いである猛には、その表情が心配だということを理解している。

龍一に心配させていることを、猛は申し訳なく思う。

けれど、龍一に事情を正直に話すわけにはいかない。

猛にとって、父親である彰より近い憧れの男である龍一に、こんなことを話せるわけがない。

猛は、女性への性欲はあるが、チンポセックスにおいて不能であり無能であるペットボトル早漏チンポをぶら下げており、女性とのセックスなどできるはずがない。

そして、猛はケツマ○コの奴隷であり、ケツマ○コをチンポで使われ、蹂躪される快楽を拒めず、断つこともできない淫乱なのだ。

だから、女性との結婚生活など、できるはずがないのだ。

こんなことを、龍一に告白することは、猛には不可能だ。

猛は、ケツマ○コで男たちとつながったこれまでの関係をなかったことにはしたくない。

男としてどうかしている関係だと判断しているが、それでも、ケツマ○コとチンポとの関係を無価値なものだと、猛は思いたくない。

だが、龍一に問われ、猛は強く自覚してしまう。

猛は、ケツマ○コを使われ、蹂躪される快楽が後ろめたい。

龍一や彰が体現している男らしさとは真逆の、卑しい肉欲の奴隷、ケツマ○コの奴隷だと感じている。

猛は、チンポが好きだ。

猛の淫乱なケツマ○コを舐め、蹂躪し、気持ちよくしてくれるチンポが好きだ。

だというのに、猛は、ケツマ○コとチンポとの関係を恥じ、ケツマ○コの淫乱さを、男としてあってはならないと感じている。

今まで、言葉として自覚しなかった後ろめたさ、猛の周囲で結婚や婚約など、男女の社会性を刺激する言葉が聞かれるようになるまで、見て見ぬふりをしてきた後ろめたさが、猛の心に突き刺さる。

卒業記念エロ動画制作中にも、泰輔の言葉で無意識の底から引きずり出された後ろめたさや罪悪感が、龍一の問いかけで、猛はより鮮明に自覚させられる。

ああ、こうも強烈に突きつけられては、認めないわけにはいかない。

高坂猛は、ケツマ○コの奴隷だと自称していた。

だが、それは、欺瞞だった。

猛は、チンポを求めているのはケツマ○コであると己を誤魔化していた。

ケツマ○コが、チンポを求めるから、猛は従うしかない、と思い込んでいた。

猛自身が、チンポを求めたわけではない。

そして、早漏でなければ、女性との恋愛のためらう理由がない。

少なくとも、猛はそう思っている。

早漏でなければ、ケツマ○コが淫乱でなければ、猛は、女性と恋愛をし、セックスをできたに違いない。

そうした無意識化の予防線こそが「ケツマ○コの奴隷」「ケツマ○コ奴隷」という詭弁だったのだ。

猛は、己のケツマ○コとチンポとのつながりのそれぞれを、唯一無二の尊さと口にしなが、己の淫乱さの責任をケツマ○コに押しつけ、ケツマ○コのせいにしてきたのだ。

猛自身の卑劣さが、ケツマ○コとチンポの関係を穢し続けてきたのだ。

「……すいません。

その、説明できないです」

猛は、龍一の問いかけによって自覚させられた己の欺瞞を説明することができず、龍一に頭を下げることしかできない。

「俺では、お前の苦悩の助けにはなれないか」

龍一が猛を気遣う問いかけを発するが、龍一だからこそ、猛は話せない。

猛にとって、龍一は憧れの男だ。

猛にとって、男の理想像として身近な男だ。

その龍一に、猛が抱く卑しい迷妄を話せるはずがない。

「すいません……」

だから、猛は龍一に頭を下げ、謝罪を重ねるしかなかった。

「……俺は、嘘つきで、どうしようもない卑怯者だ。

男とか女とかに拘っていたら、俺とアナルセックスをしてくれた皆の快感の思い出が、汚れると思った

こんなことを言っておいて、俺自身が、皆とのつながりを否定していた。

誤った関係だと感じていた。

皆が俺のケツをチンポで舐め、蹂躪してくれたあの快感を、俺が穢れだ感じていた。

だから、そんな俺を誤魔化すために、ケツマ○コの奴隷、ケツマ○コ奴隷だって、俺は何度も口にしていたんだ。

ケツマ○コが淫乱だから、俺はアナルセックスをする。

ケツマ○コが淫乱だから、俺はチンポを求める。

チンポを求めているのは、俺自身ではなくて、ケツマ○コのせいだ、ってそういう詭弁で、皆を裏切っていたんだ。

俺は、皆とのアナルセックスが大好きなはずなのに、こんなことを思っていて、悔しい。苦しい。辛い。

でも、俺はもう、どうすればいいか分からないんだ。

頼む、どうしようもない俺を罰してくれ」

猛は、尊敬する男である龍一との会話で自覚させられた己の欺瞞を、泰輔に告白し終えた。怒られる、いや、軽蔑されるだろう、と猛は確信している。

泰輔は、卒業記念エロ動画制作のときに、「猛を抱きたいと思っていた」と猛を求め続けていたことを告白してくれた。

それに対して、猛の回答が、こんな卑しい欺瞞なのだ。

酷い裏切りだ。

猛は、己の卑しさ、矮小さを恥じている。

「……エロ動画制作のときにもそんな感じのことを聞いたけどさ。

改めて言葉にされると、なんだろう……上手い言葉が見つからないや」

泰輔は、猛への怒りや軽蔑を見せてはいないものの、困惑している様子だ。

「すまない……」

猛は、泰輔を困らせたことに謝罪をする。

猛自身、猛の卑しさや矮小さは猛の問題でしかなく、卒業を、新たな門出を控えた泰輔に背負わせるべきではないことを。

ただ、猛にとって、この悩みを告白できる男は、泰輔だけなのだ。

「……あのな、話を整理していいか？」

「ああ」

泰輔の問いかけに、猛は頷いた。

「猛は、お見合いの話が出たことを切っ掛けで、チンポを拒めないことをケツマ○コのせいにしていたことに気がついたってことだよな。

早漏でなければ、ケツマ○コが淫乱でなければ、普通に女の子と恋愛して、セックスできたんじゃないかって未練が残ってたことも自覚したってことだよな。

で、猛とのアナルセックスをかけがえのない時間だと信じてきた俺への裏切りでもあるから、猛自身を赦せないってことか」

「ああ」

泰輔が口にした説明は、猛の身勝手さと卑劣さが端的に示されている。

「……あのさ、猛、調教してほしいって言ったよな。

俺に、猛を調教してほしい、って言ったよな」

「ああ」

泰輔の重ねての問いかけに、猛は頷く。

「それはつまり、今の猛が抱える罪悪感とか欺瞞とかを罰してほしいって、そういうことか」  
「ああ、そうだ。」

俺が昔、アナル調教を受けて、ケツマ○コの快楽に目覚めたときのように、調教されれば、罰せられれば、何かが変わるかもしれないんだ。

俺は、俺の卑しさを、欺瞞を罰してほしいし、どうすれば、この卑劣さから抜け出せるのか教授されたいんだ」

「……俺を選んだ理由、聞いていいか？」

だってよ、お前、大学に入る前から、色んな男にケツマ○コを使ってもらってたんだろ。

それこそ、お前のケツマ○コを開発したOBとか、ケツマ○コに目覚めたお前にトコロテンを仕込んだ同窓生とか、お前が童貞を受け取った貴嶋元部長みたいな立派な雄とか、選び放題だろ？

なんで、俺なんだ？」

泰輔が猛の両肩を掴み、真剣な表情で猛に問いかけてくる。

「泰輔が候補に挙げた人たちとか、考えたよ。」

でも、今の俺にとって、俺の卑しさを、欺瞞を委ねられるって思えたのは、泰輔なんだよ。

俺を非難し、罵倒し、それでも、俺を抱きたいって言ってくれた泰輔が、俺にとって、一番信頼できる男なんだよ」

「……でもさ、お前、親父さんとは別に、その、龍一って人のことも特別扱いしているよな。」

それこそ、龍一さんに叱られた方がいいんじゃないかねえの？」

「意地の悪いことを言うなよ、泰輔。」

龍一さんは尊敬する男だから、俺が、こんな淫乱だなんて、告白できるはずがない」

「家族でもない、男なのに、か」

「ああ」

泰輔の問いかけに、猛は頷く。

泰輔が、真剣な表情で猛を見つめている。

猛を求めている目であり、猛を拒もうとする表情だ。

矛盾しているように見えるが、どちらも、泰輔の本心のように、猛には見える。

猛は、泰輔の心を汲み取れない。

長年の己の欺瞞さえ、最近まで自覚できなかった猛が、泰輔の心境を汲み取ろうというのがそもその間違いなのだろう。

しばらくして、泰輔が口を開いた。

「俺が、お前の人生を台無しにするとは思わないのか。」

俺が、猛に嫉妬していて、猛の人生を滅茶苦茶にしてやろうって、そういう昏い欲望を抱いているとか、そういうこと、考えてないのか？」

泰輔の目は猛を強く求めているように見える。

泰輔の表情は、猛を拒もうとしているように見える。

だから、泰輔の問いかけは、泰輔の本心であり、猛の人生を左右する重要な問いかけだと、猛は感じた。

泰輔に、高坂猛としての人生を壊される。

猛はそのことを想像した。

例えばの話、泰輔が猛の淫乱な性行為を龍一や実家の彰、あるいは、ネット上に拡散させれば、猛の人生は滅茶苦茶になるだろう。

けれど、それこそが、欺瞞をもって関係をつないできた猛への報いだというのは、猛はそれを受け入れたい。

高坂猛は、ケツマ○コのせいにして生きてきた己の欺瞞を罰してほしいのだ。

「それでも、俺は、俺の人生を、俺の欺瞞を、泰輔に委ねたい。

頼む。

俺に罰を与えてくれ。

俺を調教してくれ。

俺の中の欺瞞を、お前の欲望で打ち砕いてくれ。

俺を、助けてくれ」

猛は、泰輔に己のこれまでの欺瞞を、これからの人生を差し出す決意を口にした。

「……分かった。

俺が、お前を調教する」

泰輔が重々しい口調で断言する。

「俺が、高坂猛の欺瞞を罰する。

お前の淫乱さをケツマ○コのせいにしてきた卑しさに鞭を与える。

猛がペットボトル早漏チンポや、淫乱ケツマ○コのせいにしてきたことすべてを、猛自身が求めていることだと、思い知らせてやる。

猛は、高坂猛の人生を俺に差し出す覚悟があるか？」

泰輔の目は、猛を強く求めている。

泰輔の表情は、猛への情念に歪んでいる。

その情念が、猛を壊そうとしていることを、猛は肌で感じる。

だが、猛は、今の欺瞞を抱えたままでは生きられない。

だから、猛は泰輔の己の人生を委ねたのだ。

「お願いします。

俺の、高坂猛の人生を泰輔に差し出します。

卑しい高坂猛を、調教してください」

猛は、泰輔にすべてを委ねる言葉を恭しく宣言した。

## 出願 人生放棄宣誓

「じゃあさ、まずは談話室に行って、皆の前で宣誓してもらおうか。

卑しいお前が、自分の意志で人生を放棄し、俺に服従することを宣誓しろ」

「分かりました」

泰輔の命令に、猛は頷いた。

「ああ、お前の服と下着、全部持ってこいよ。

剣道の装備は取りに行かなくていい。

服と下着はゴミ袋に入れておけよ」

「分かりました」

泰輔の命令に従い、猛は自身の机の横に掛けてあるゴミ袋を何枚か引き出して広げる。

それから、箆笥を開け、ジャージや私服、愛用の赤のボクサーパンツや赤ふんどしを無造作にゴミ袋に詰めていく。

泰輔が何を意図してこのような命令を下したのか、猛には分からない。

お見合いの話を出されるまで、これまでの猛の欺瞞、「ケツマ○コの奴隷」という言い訳を自覚すらしなかった未熟者が、泰輔の意図を汲み取ろうというのが間違いなのだ。

加えて、猛は、泰輔に宣誓したとおり、これまでの人生を、猛の欺瞞を泰輔に差し出す決意をしている。

ならば、泰輔の命令に従い、泰輔から罰を与えてもらえるように努めるだけなのだ。

ゴミ袋六つ分の衣類を猛は両腕に抱えて運ぶことにする。

寮の部屋を出て、談話室に向かう途中、寮生である加藤と深山が猛を見て首をかしげる。

「猛、今日は資源ゴミの回収日じゃないぞ」

「リサイクル……でもないよな、ボクサーパンツとか赤ふんどしも入ってるし」

寮生たちの疑問に対し、猛は回答する。

「ああ、泰輔の命令なんだ。

俺の頼みを聞いてくれた泰輔が、俺に罰を与えてくれるんだ」

「へ？」

「は？」

猛の言葉に、加藤と深山が呆然とする。

「いや、猛、何があったんだよ、いや、マジで」

「泰輔がやらかすならまだ分かるけど、お前が泰輔に罰を与えられるって、何かの冗談だよな？」

「本当だ。

理由については、談話室で宣誓するから、聞いてほしい」

猛はそう告げ、談話室に向かう。

加藤と深山は顔を見合わせた後、スマートフォンを取り出し、トークアプリで連絡し始めている。

もうすぐ、泰輔に罰を与えてもらえる。

猛の欺瞞、猛の卑しさに鞭を振り下ろされるのだ、と思うと、猛は不安になる一方、穏やかな気持ちにもなる。

泰輔から与えられる罰への不安を否定することは猛にはできない。

だが、その一方で、欺瞞に気がつかずにケツマ○コとチンポとの関係をつないできた己の卑劣さ、己の淫乱さをペットボトル早漏チンポとケツマ○コのせいにしてきた懦弱さを叱咤されるのだと思うと落ち着くのだ。

それは、あるべき罰を求める罪人の心理だ。

己の淫乱さをケツマ○コのせいにしてきたことを自覚した時点で、「高坂猛は罪人である」

と猛は定義した。

ケツマ○コを使ってくれた皆への裏切りの罰を受けたいのだ。

絡まった欺瞞と虚栄心を打ち砕かれないのだ。

猛は粛々と談話室へと歩みを進める。

それは、過酷な運命でも粛々と受け入れる貴人の足取りであった。

卒業前、あるいは、年度末ということで、忙しい寮生がそれなりにいるというのに、談話室は半分以上の席が寮生で埋まっていた。

泰輔は談話室のステージに立ち、猛を手招きしている。

猛は、己の衣服を入れたゴミ袋を抱えたまま、泰輔の隣に立つ。

「さてと、この様子だと噂はもう広まっているだろうけど、猛から大事な話がある。

ほら、ゴミ袋を置いて懺悔しろよ」

「分かりました」

猛は、泰輔の命令に従い、ゴミ袋をステージに置き、猛を見つめる寮生たちに対し、宣言をする。

「高坂猛は、皆のチンポで俺のケツマ○コをかわいがってもらいながら、皆を裏切っていました！

ケツマ○コとチンポでつないだ関係に耽溺しながら、この関係に罪悪感を抱いていました！

ケツマ○コの奴隷という言葉、皆は覚えているだろう！

俺の口癖だ！

あの言葉こそ、俺の欺瞞の証だ！

俺は！

ケツマ○コが淫乱だからチンポを求めていると俺自身を誤魔化していた！

俺のチンポが早漏でなければ！

俺のケツマ○コが淫乱でなければ！

俺は！ 雄としてチンポセックスができるかもしれないと！

俺を誤魔化し続けてきた！

これは！

俺のケツマ○コを舐め、愛用してくれた皆への裏切りだ！

だから！

俺はこの欺瞞に罰を与えてもらいたい！

そのために！

高坂猛は！

鳴島泰輔に！ 俺の人生を差し出し！

俺の人生に対する一切の権利を！

放棄します！」

猛は、羞恥に震えながら、己の欺瞞を告白した。

猛の中の常識と倫理観が、こんなことは間違っていると叫んでいる。

その叫びは、猛の中で龍一の姿に変わる。

だが、己の欺瞞を自覚した猛は、己の卑しさを、卑劣さを、放置できない。

猛とケツマ○コとチンポの関係を築いてくれた皆への裏切りを償いたい。

俺のケツマ○コを使ってくれるチンポはすべて愛おしい。

このようなことを口にしておきながら、猛は、己の淫乱さをケツマ○コのせいにしていたし、ノンケとして女性との恋愛関係を構築しようとしないう理由を、早漏と淫乱ケツマ○コのせいにしてきた。

高坂猛が淫乱なのではない。

ケツマ○コが淫乱なのだ。

こんな欺瞞を重ねてきた己を、猛は赦せない。

だから、罰を与えてほしいのだ。

猛の告白に、談話室に集合した寮生たちが顔を見合わせる。

皆、猛の欺瞞に困惑しているようだ。

当然だろう、と猛は思う。

あれほど、チンポチンポと求めてきた猛が、己の淫乱さをケツマ○コのせいにしてまともぶっていたと知れば、これまでの快樂の思い出を汚されたと感じるだろう。

「分かっただろ、皆。

猛には、罰が必要だ。

猛は、この卑しい欺瞞を正されるべきだと決めている。

だから、俺は、高坂猛の人生を没収し、こいつを調教……」

ここまで宣言した泰輔が、にやりと笑った。

「調教って言うのは聞こえが悪いよな。

調教っていうと、普通の人間の信念、性癖を曲げる語感だもんな。

だが、猛は、猛自身が誤魔化していようが、淫乱チンポ狂いだ。

だから、これから、こいつに試験を課す」

泰輔が寮生たちを見回し、両手を広げ、宣言する。

「そうだ！

俺は！ 鳴島泰輔は！

高坂猛に試験を課すぞ！

この卑しい欺瞞の塊が！

この先、俺たちのチンポを受け入れる資格があるかどうかを試す！

俺たちのチンポを受け入れるのに相応しい性根になれるかどうかを試すぞ！」

泰輔の宣言に、寮生たちが呆気にとられた顔をする。

寮生たち、いや、丈翼大学の男たちにしてみれば、猛が差し出したケツマ○コを使われてもらっているのであり、猛とのアナルセックスの主体は猛にあるという認識だ。

だから、泰輔の宣言は、ケツマ○コの淫乱さをもって男たちのチンポを支配してきた猛への下剋上なのだ。

「いや……マジで？」

寮生の一人である三井が戸惑いの声を上げる。

「ああ、俺は、この卑しさを罰してもらいたい。

だから、泰輔の言葉に間違いはない」

猛は、戸惑いの声を上げた三井の目を見つめ、堂々と返答する。

だが、三井も、声を上げない他の寮生たちも、泰輔の宣言に戸惑い、半信半疑の様子だ。

だから、猛は談話室のステージで土下座をし、叫んだ。

「皆、頼む！

どうか！ 俺のわがままを許してほしい！

俺の卑しさを叩きのめしてほしい！

泰輔に！

俺の人生を！ 委ねさせてほしい！」

猛の叫びを受けて、談話室が沈黙に包まれる。

しばらくして、三井の声が談話室の空気を震わせる。

「本気なんだな、猛。

本気なら、仕方ないよな」

三井の言葉を受けてから少しして、寮生たちが賛同の声を上げ始めた。

その声が収まったころ、泰輔が声を上げる。

「じゃあ、猛、お前が人生を差し出したことを披露しないといけないな。

立って、服を全部脱げ。

人生を俺に委ねた猛に、服は必要ないよな」

「分かりました」

泰輔の命令に従い、猛は立ち上がり、ジャージを脱ぎ始めた。

剣道で鍛え上げられた上半身が露わになる。

猛は色白の肌をしているが、その逞しい筋肉により西洋彫刻のような魅力を放っている。

続いて、猛が赤いボクサーパンツ一枚になる。

色白の肌にボクサーパンツの赤が良く映えている。

そして、猛のペットボトル早漏チンポは平常時でも大きなもっこりをつくっている。

早漏でさえなければ、そのもっこりの大きさも雄としての魅力となっただろう。

猛が、赤いボクサーパンツを脱ぐ。

ばるるるん！

猛のペットボトル早漏チンポが露わになった。

猛のペットボトル早漏チンポは、平常時でも 11.6cm と大きい。

そして、陰茎は太く逞しく、ずる剥けの亀頭は綺麗な赤色をしており、雁首の大きさが目立つ。

性の矢印とも評されたことがある陰茎なのだ。

玉袋も大きく、金玉の大きさはSサイズの鶏卵程度だろう。

色白の下腹部にはチン毛が見られない。

猛は習慣として、チン毛やケツ毛を自身で剃っているからだ。

無毛の下腹部に鎮座するペットボトル早漏チンポは、チンポであるにもかかわらず、男性器特有の卑猥さ、汚らしさのない、清潔感に溢れたチンポだ。

西洋彫刻のような猛の裸体ならば、西洋彫刻のように小さな包茎チンポが備わっているべきだというのに、猛のペットボトル早漏チンポは大きい。

そして、その大きなチンポが不自然さもなく、猛の裸体と調和している。  
たとえ屋外だとしても、堂々としていればその裸体は何らかのアートだと誤解されるだろう。

まさに、男性美の到達点の一つが、猛の裸体なのだ。

「よし、猛。

今脱いだ服も全部、ゴミ袋に入れろ」

「分かりました」

猛は泰輔の命令に従い、脱ぎ捨てたジャージやボクサーパンツもゴミ袋に押し込む。

「じゃあ、俺は準備があるから、お前は寮の門の前までゴミを運んでそのまま立っている」

泰輔の命令に、猛は羞恥で身体を震わせる。

猛の中の社会常識と倫理観は、全裸で屋外に出ることを悪いことだと糾弾する。

もちろん、猛の羞恥心もまた、全裸で屋外に出ることを拒んでいる。

「猛は、人生を俺に差し出したんだよな。

その言葉に、嘘偽りがあるなんて、言わないよな。

お前は、卑劣な高坂猛と決別するんだよな」

泰輔の問いかけで、猛の決意が固まる。

そうだ、猛は、欺瞞を抱いて生きてきた己に罰を与えられたい。

だから、泰輔に調教を依頼し、泰輔に人生を差し出すことを宣誓したのだ。

「分かりました」

猛は、己の中で暴れようとする社会常識と倫理観、羞恥心をねじ伏せ、泰輔の言葉に頷いた。

そして、ゴミ袋を抱え、全裸で寮の門の前まで移動し始めた。

二月の風は冷たく、猛の肌を、特に敏感なずる剥け早漏亀頭を刺激する。

たとえ、両手で覆っていても、二月の風の冷たさは猛の敏感なずる剥け早漏亀頭に突き刺さるようだ。

だが、猛が震えているのは、寒さと早漏亀頭への刺激だけではない。

剣道部の寮の門の前、つまり、屋外で猛は全裸で立っている。

丈翼大学の剣道部寮は、キャンパスの敷地と隣接しているため、一般人が前を通過することは殆どない。

だが、丈翼大学関係者はこの辺りを通行する。

だから、猛が全裸に靴だけの姿で寮の門の前で立っていることは、既に何人かの男たちに見られている。

猛の裸体は、色白の肌と鍛えられた筋肉が相まって、西洋彫刻のような雰囲気漂わせている。

だから、全裸であろうとも、堂々としていれば、ある種のアートであると誤魔化せることもある。

けれど、肝心の猛は、全裸で屋外に立っているという状況に羞恥し、両手でペットボトル早漏チンポを隠し、顔を赤く染めているのだ。

今のところ、通行人たちには奇異の目を向けられるだけであり、侮蔑の言葉や、スマートフォン向けられたわけではないが、猛は恥ずかしさで震えが止まらない。

恥ずかしいし、みっともない。

猛は、今の己をそう感じている。

だが、このみっともなさこそが、今の猛には相応しいのだと、猛は判断している。

あれほど、チンポを求めてきた猛が、ケツマ○コとチンポとのつながりを罪深いと感じ、己の淫乱さをケツマ○コのせいにしてきたのだ。

この卑しい性根に与えられるべき罰なのだ、と猛は判断している。

しばらくして、泰輔が寮の玄関から出てきた。

「準備ができたぞ、猛。

そのゴミ袋の一つを、男子陸上部の寮まで運べ。

ああ、両手で抱えろよ」

泰輔の命令に、猛は心臓が跳ね上がるかと思った。

男子陸上部の寮もまた、丈翼大学のキャンパスに隣接している。

だが、立地の都合で移動経路が丈翼大学のキャンパスを通過しなければならないのだ。

両手でゴミ袋を抱えれば、当然、猛はペットボトル早漏チンポを隠せなくなる。

つまり、猛はキャンパス内を、女性もいる場所を、全裸で、ペットボトル早漏チンポを隠すことなく、移動しなければならないのだ。

「お前は、俺に人生を差し出した。

なら、猥褻物陳列罪になろうがどうなろうが、お前には関係ないだろ。

それとも、高坂猛は、欺瞞を抱えて、これから先も、お前の淫乱さをケツマ○コのせいにして生きていくのか？」

「俺は、贖罪のために泰輔に人生を差し出した。

この言葉に偽りはない。

泰輔の命令に従います」

泰輔に問いかけられ、猛は己の宣誓を再度口にする。

そして、泰輔の命令に従い、猛は両手でゴミ袋を一つ抱える。

ぶるるん！

両手から解放されたことで、猛のペットボトル早漏チンポが揺れる。

びゅっと強い北風が吹き、猛の色白の肌に、そして、敏感な早漏亀頭に突き刺さるような冷気をぶつける。

「っ……」

過敏な早漏亀頭への刺激で、猛は小さく声を漏らす。

「ほら、行くぞ」

泰輔に引き締まったケツを叩かれ、猛は男子陸上部の寮へと歩き始める。

丈翼大学のキャンパスに入ると、流石に通行人の数が増える。

すれ違う男子学生がぎょっとした顔する。

女子学生のグループが猛を見て、顔を背けて早足で去っていく。

猛は今、間違いなく、猥褻物陳列罪を犯している。

「恥ずかしいか、猛？」

「……恥ずかしいです」

泰輔の問いかけに、猛は正直に返事をする。

全裸で大学のキャンパスを歩いていることが恥ずかしい。

ペットボトル早漏チンポを隠せないことが恥ずかしい。

これまで、丈翼大学剣道部主将としての姿を見せてきた丈翼大学のキャンパスで、全裸で歩いていることが、猛にはとても恥ずかしいのだ。

露出癖のない猛のペットボトル早漏チンポは羞恥と北風の冷たさで縮み上がっている。

それでも、太々しい存在感を放っているが、チンポセックスの役に立たない不能にして無能の時点で、無価値な存在感だ。

すれ違う男子学生、女子学生が、全裸の猛を見て、ぎょっとした顔をしている。

当たり前だ。

丈翼大学剣道部主将である高坂猛が、全裸で、ペットボトル早漏チンポを隠さずにフルチンぶらぶらで歩いていて、驚かないはずがない。

「やだ……全裸とかありえないじゃん」

「非常識よね」

「パフォーマンスか、あれ？」

「いや、ただの変態プレイだろ？」

すれ違った目撃者たちの言葉の一つ一つが、猛の社会常識と倫理観、羞恥心に突き刺さる。

その一方で、羞恥に震える心を、猛は受け入れている。

猛は、皆のチンポでかわいがってもらいながら、その関係性を淫乱ケツマ○コの責任にして、猛自身の欲望ではないと、己を騙し続けてきた。

ケツマ○コとチンポとのつながりを、罪深いものと、ふしだらなものだと感じ、淫乱ケツマ○コのせいにしてきた。

その卑しさへの罰が今、与えられているのだ。

猛は、羞恥で全身を薄紅色に染めて男子陸上部の寮まで辿りついた。

「よく来たな、鳴島、高坂」

陸上部の今代の部長であった影山が猛たちを出迎える。

「話は聞いていたが、本当なんだな。」

高坂の望みなんだな」

影山に心配そうに問われた猛は、大きく頷く。

「ああ、俺は、俺の望みで、泰輔に俺の人生を差し出した。

泰輔は、俺のために、俺の欺瞞や卑しさに罰を与えてくれているんだ」

猛の言葉に、影山が真剣な表情を見せる。

「……高坂が、それで納得できるのなら、俺らは何も言わない。

じゃあ、裏庭まで来いよ」

男子陸上部の寮でも猛は、何度も何度も淫乱ケツマ○コでチンポを迎え入れてきた。

だから、裏庭の場所も分かっているのだが、ここは男子陸上部の寮なので、猛と泰輔は影山の先導に従い、裏庭まで移動する。

裏庭には、男子陸上部の寮生たちが集まっていた。

そして、その人だかりの中央には、山となった落ち葉と、水の入ったバケツが六つ、消化

器が三本用意されている。

「話は聞いていると思うけど、俺は、猛の頼みで、猛に罰を与えている。

猛は、猛自身の意志で、贖罪のために、俺に高坂猛の人生を差し出した。

とはいえ、言葉だけで、信じろってのは無理だよな。

だから、猛、お前の覚悟を、見せなくちゃならないよな」

泰輔が猛の目を真剣な表情で見つめている。

「お前の本気を、俺に、いや、お前がケツで抱いてきたこいつらに見せろ。

お前が、高坂猛の人生を俺に差し出した証として、そのゴミ袋の中身に、お前が火をつけて燃やせ。

人生を差し出したお前には、服を着るなんて、人間らしい行動は必要ないからな」

泰輔の言葉には、傲慢さが溢れているが、猛には、泰輔の目が不安に震えていると分かった。

猛が、罰を求める一方で、非常識な行為に対して戸惑い、抵抗感を抱いているように、泰輔もまた、猛に罰を与え、辱めることへの不安、後ろめたさがあるのだ、と猛は感じた。

だとすれば、罰を求め、高坂猛の人生を差し出したことが本気であり、泰輔が後ろめたさを感じる必要がないことを、猛は己の行動で示さなければならない。

「分かりました。

俺が、高坂猛の人生を泰輔に差し出した証として、俺の服を、ここで燃やします」

猛の言葉に、泰輔が一瞬だけ、狼狽えた様子を見せる。

だが、次の瞬間には、猛を打ち据える懲罰者としての役割に戻る。

「ああ、お前の欺瞞で快樂の思い出を穢されたこいつらへの贖罪の炎を燃え上がらせろ」

泰輔に引き締まったケツを叩かれた猛は、そのまま落ち葉の山の前に立つ。

そして、無造作にゴミ袋の中身をひっくり返し、己の衣類や下着を落ち葉の山に落とす。

そして、猛は影山から携帯発火具を受け取ると、居合わせた男子陸上部の寮生たちに、改めて宣言する。

「俺は、俺の欺瞞、俺の卑しさを罰してもらうために、泰輔に高坂猛の人生を差し出した。

その証として、俺は、俺の服を燃やします！」

そして、猛は落ち葉の山に火をつけた。

炎が徐々に燃え広がるのを見て、猛は落ち葉の山から下がる。

炎が落ち葉とともに、猛の衣服や下着を焼いていく。

燃えていく猛の衣類は、猛が泰輔に差し出した高坂猛の人生の象徴だ。

社会常識と倫理観を貴ぶ猛の感性は、己の人間らしい在り様の象徴である服を燃やしたことに、驚愕し、猛の主導権を取り戻そうとする。

社会常識や倫理観、そして、羞恥心がこれまでにない強さで暴れていることを猛は感じたが、猛は、それらの抵抗をぐっと飲み込む。

己の服に火をつけ、燃やしたことで、猛は、己の決心がより強く固まったことを自覚する。

チンポを求める己の淫乱さを、ケツマ○コのせいにしてきた卑怯者の高坂猛。

「ケツマ○コの奴隷」と口にすることで、淫乱ケツマ○コが悪いのだと詭弁を弄してきた卑劣な高坂猛。

猛は、この炎によって、証を立てたのだ。

「ケツマ○コの奴隷」という言葉で目を背けてきた己の欺瞞に振り下ろされる懲罰をすべて受け入れるという証を、今、立てたのだ。

「本気だな、高坂……

がんばれってのは、変、だよな。

……お前が、納得できる結果になることを応援している」

「ありがとう、影山」

真剣な表情で言葉を選んだ様子の影山に、猛は頭を下げて感謝を示す。

そして、ゴミ袋を一つだけ、と告げた泰輔の意図にも気がついた。

猛は、この丈翼大学の男たちとケツマ○コとチンポとの関係をつないできた。

それは、別に、男子陸上部に限った話ではない。

ボクシング部でも、水泳部でも、サッカー部でも、野球部でも、いや、運動部に限らず、セックスチケットを入手し、猛とのアナルセックスを求めた男たちに、猛はケツマ○コを使ってもらってきた。

残り七つの袋は、そうした運動部の寮の数には足りない。

けれど、泰輔は、猛が泰輔に高坂猛の人生を差し出したことを証明させるために、ゴミ袋を運ばせ、燃やさせるつもりなのだろう。

それも、全裸で、ペットボトル早漏チンポを隠すことも許されない状態で歩き回らされるのだ。

高坂猛の人生を差し出したとはいえ、猛の社会常識と倫理観、羞恥心はまだ、猛の中で暴れている。

けれど、猛の社会常識らを許せば、猛は、猛をチンポでかわいがってくれた男たちとの関係を穢したままになってしまう。

だから、猛は、羞恥に震えながらも、泰輔の命令に従う決意を固めるために、炎を見つめる。

己の手で燃やした衣類。

己の手で燃やした、高坂猛の人生の象徴である衣類が燃える炎を。

これまでの卑劣な高坂猛を罰するための篝火を、猛はじっと見つめ、泰輔の命令に従う決意を練り上げ、固めていった。

「さあ、猛。

もう分かったと思うが、お前がお前には必要のない服を燃やすのは、あと七回だ。

次に行くぞ」

「分かりました」

泰輔の命令に従い、猛は男子陸上部の寮を後にする。

両手が空いたので、猛は己のペットボトル早漏チンポを両手で隠しながら泰輔の後ろをついていく。

猛のペットボトル早漏チンポは玉袋も金玉も人並み以上なので、影山たちに背を向けて去っていく猛の引き締まったケツと太ももの間で玉袋がぶるんぶるんと揺れていた。

「影山先輩、なんつーか、すごいですね、あの二人」

全裸で去っていく猛を見送った影山は、次期部長である日向に声を掛けられ、頷く。

「ああ、卑劣な自分自身を罰してほしいと人生を差し出した高坂もそうだが、それを受け取って、罰を与える鳴島も、常人の神経じゃない」

そこまで口にして、影山は苦笑いを浮かべた。

「それを言えば、ノンケなのに、高坂のケツマ○コに溺れた俺らも、まともな神経じゃないな」

七つ目のゴミ袋を男子サッカー部の寮で燃やしてきた猛は、羞恥に色白の肌を染め、全裸で何度も何度も丈翼大学のキャンパス内を歩いた緊張による冷や汗で全身を濡らして、剣道部の寮に戻ってきた。

猛は、何度も何度も、丈翼大学のキャンパス内を全裸で移動し、往路はペットボトル早漏チンポを隠せない状態を続けてきた。

そして、男子学生や女子学生、キャンパス内の店舗に荷物を輸送している途中の配送会社の社員など、様々な者たちに、猛が全裸で、ペットボトル早漏チンポをぶらぶらと揺らしながら歩いている姿を晒してきた。

猛の中ではまだ、社会常識と倫理観、羞恥心が暴れ、猛の馬鹿げた行為を止めさせようとしている。

だが、高坂猛の人生に見立てて燃やしてきた七つの炎が、猛の決心を支えている。

ケツマ○コとチンポとの関係を恥じ、おぞましいと感じる一方で、猛は、ケツマ○コとチンポとの関係を尊い関係だと信じている。

だから、ケツマ○コとチンポとの関係を恥じる己を、猛は滅したい。

己の淫乱さをケツマ○コのせいにしてきた欺瞞を打ち据えてほしいのだ。

「じゃあ、最後の炎だ。

俺らの前で、お前の最後の服を燃やそうな」

猛が泰輔の命令に従い、全裸で丈翼大学のキャンパスを右往左往している間に、剣道部の寮生たちが落ち葉をかき集めて燃やす準備をしてくれていた。

猛は、これまで通りに落ち葉の前に立ち、改めて宣言する。

「俺は、高坂猛の人生を、泰輔に差し出し、俺の欺瞞を罰してもらいたい。

その証として、俺の服をここで燃やす。

人生を差し出した俺に、服は必要ない！」

そして、猛は丈翼大学で残された最後の衣類に、自らの意志で火をつけた。

猛の、泰輔の、そして、猛が四年間を過ごしてきた剣道部の仲間たちの前で、猛の最後の衣類が燃えていく。

「猛、お前が、俺たちのチンポを与えられるのに相応しいか。

それを確かめる試験は、明日からが本番だ。

試験の結果に、俺が納得するまで、お前の人生は俺のものだ。

だから、高坂猛の人生の所有者として、宣告する」

泰輔が、猛の最後の衣類を燃やす炎の側で、猛を見据え、宣告する。

「猛は、その性欲から排泄まで、すべて、俺の管理下に置かれる。

人生を俺に差し出したお前に、部屋も、プライバシーも必要ない。

自慰行為はもちろん、ケツマ○コも使わせない。

談話室がお前に与えられた寝床で、ションベンもペットボトルにして、それを飲め。

大便だけは後始末が面倒だからトイレを使わせてやる。

風呂も、シャワーも必要ない。

絞ったタオルで身体を拭くことだけ、許してやる。

分かったな」

泰輔の命令は、猛の人間性を否定するものだ。

猛の中で、社会常識と倫理観、羞恥心が激しく反発し、泰輔への憤りを募らせる。

だが、その一方で、ケツマ○コとチンポとの関係を穢してきたことを恥じる猛は、泰輔の容赦のない命令に感謝していた。

猛は、あれほどまでに求め、悦んできたケツマ○コとチンポとの関係を、己自身で否定し、淫乱ケツマ○コのせいにしてきた。

自身の卑劣さへの罰を求める猛にとって、泰輔の命令は想像を飛び越えた苛烈な鞭であり、猛の卑劣さに相応しい報いだと感じたのだ。

「分かりました。

高坂猛の人生の所有者である泰輔の命令をすべて、俺は受け入れます」

猛は、己の決意を改めて宣誓した。

猛は、猛の中の欺瞞、卑劣さを打ち据えられたい。

猛は、ケツマ○コとチンポの関係を穢した己を罰してほしいのだ。

## 奥付

『淫穴主将猛 覚悟の卒業試験』サンプル

初出：2024 年 9 月 29 日

作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html)

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)